辺野古土砂北九州

発行…2023 年 6 月号・№41

写真は、2021 年 12 月の辺野古・大浦湾の様子(しんぶん赤旗より・許可を得て小型無人機で撮影)。　2021 年 11 月、玉城デニー知事は、大浦湾側の埋め立て工事を不承認とし、現在、県と国の裁判が続いています。そのような中、浜田靖一防衛相は 6 月 16 日の会見で、大浦湾側の埋め立てに必要な土砂の準備のため、新たな造成工事の手続きを進めていることを明らかにました。また、辺野古側の埋め立て区域に、大浦湾の埋め立て用の土砂を仮置きするとしています。

≪目次≫

【辺野古】辺野古埋め立て着工 6 周年抗議海上集会(浦島悦子)・・・・・・・・ 2 ページ
【安和桟橋】沖縄防衛局の職員が「気違い」発言(宗吉信)・・・・・・・・・・・・・・・・4 ページ
【連続エッセイ】守りたい、それぞれの森(浦島悦子)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7 ページ
【連続学習会・安保条約】4・5 回目報告(天久泰)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8 ページ
【日程など】インフォメーション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12ページ

写真…浦島悦子・宗吉信(敬称略)

発行 「辺野古土砂ストップ北九州」

権力を跳ね返すように
「辺野古埋め立て着工６周年抗議海上集会」が

ヘリ基地いらない二見以北十区の会共同代表　浦島悦子

■7 隻の抗議船と 35 艇のカヌーが

2023 年 4 月 25 日午前、大浦湾に面した瀬嵩前浜から 35 艇のカヌーが一斉に海へと漕ぎ出した。先に出航していた 7 隻の抗議船（私もその 1 隻に乗った）が、一列になって進むカヌーに伴走し、あるいは激励の声をかける。空は青く澄み、波はやや高めだが、海上集会に支障が出るほどではない。エメラルドグリーンから紺碧へと、水深に伴って深まる海の色に、赤や黄色、緑、青などのカヌーやレインボーフラッグ、さまざまな色合いのノボリや横断幕が映えて華やかだ。

集会の場所に向かう、抗議船とカヌー

■メディアが「パフォーマンスの着工」を宣伝

2017 年＝6 年前のこの日、辺野古新基地建設に「着工」したと、当時の菅義偉官房長官が全国に向けて大々的に発表した。防衛省や工事関係者が浜でセレモニーを行い、護岸工事に向けて数個の土嚢を波打ち際に置いただけの単なるパフォーマンスに過ぎなかったが、内外のメディアは繰り返し、映像とともに「着工」を県民・国民に印象付けた。それは、「新基地 NO」の市民意思を示した 1997 年の名護市民投票以来、地域住民・市民のたゆまぬ反対運動、それが全県へと広がり、各種選挙で「新基地反対」の民意を示すとともに、「新基地阻止」を掲げる翁長雄志知事を誕生させた、血の滲むような 20 年の年月を嘲笑うものだった。

■「辺野古県民投票」を実現させた若者たち

「護岸着工」から 1 年半後、2018 年 12 月の「土砂投入」開始の際も、エメラルドに輝く美しい海が赤茶けた土砂によってみるみる濁り、サンゴや、そこに棲む生き物たちが埋め殺されていく映像をテレビが繰り返し流した。「抵抗しても無駄だよ」と言わんばかりに。それに先立つ同年 8 月、命を賭して県民を守ろうとした翁長知事が死去。悲しみを乗り越えて、翁長知事の遺志を継ぐ玉城デニー氏を知事に選んだ県民を、またも

嘲笑ったのだ。

そんな理不尽に対し、ワンイシューで県民の意思を示そうと、若者たちを中心に「辺野古県民投票」運動が立ち上がり、紆余曲折の苦難を乗り越えて 2019 年 2 月、実施に漕ぎつけ、投票者の 72%の「新基地反対」の民意を示した。しかし、いったん動き始めた工事は、その後も止まることなく現在に至っている。

■命の大殺戮を決して許さないと

海上集会の場所は、最初に作られた K9 護岸の前。埋め立て予定区域の大浦湾側の端だ。海底の軟弱地盤のため大浦湾側埋め立ては未だ手を付けられず、K9 護岸は、埋立土砂を陸揚げする桟橋として使われている。カヌーと抗議船が、K9 護岸の前に張られたフロートの前に続々と集まった。護岸の上にはダンプや重機、フロートの内側には赤土を積み上げた台船、少し離れて数隻の土砂運搬船も見える。フロートの内側には海上保安庁のゴムボートも多数いて、「そこは立ち入り禁止区域です。直ちに出てください」と、のべつ幕なしにマイクで繰り返す。

それらを跳ね返すように海上集会が始まった。四半世紀余にわたり新基地反対運動の軸となってきたヘリ基地反対協の挨拶、海上チームメンバー一人ひとりの思いのこもったスピーチを聞きながら、見渡す海はやはり美しい。海面から見上げる辺野古崎の断崖は、嘉陽層と呼ばれる見事な褶曲を見せ、地球生成の歴史を物語っている。大浦湾の埋め立て予定区域の 3 分の 2 を占めると言われる海底の「軟弱地盤」は、何万年もの年月をかけ、地球上でも稀な生物多様性を誇る大浦湾の生態系の底辺を支え、柔らかい砂泥に包まれて貝や甲殻類、多くの微小な生き物たちが息づく「命のゆりかご」だ。命の大殺戮を決して許さないと、改めて心に誓った。

※土砂投入開始から 4 年半経った現在の埋め立て進捗率は全体計画の約 15%に過ぎず、まだ充分引き返せる。（うらしまえつこ）

フロートの内側にたくさんの海上保安庁のゴムボートもいる中で開催された、海上集会。

沖縄防衛局の職員が「気違い」発言

悪の根本は、理不尽な工事を強行し、そこで働かせている国だ

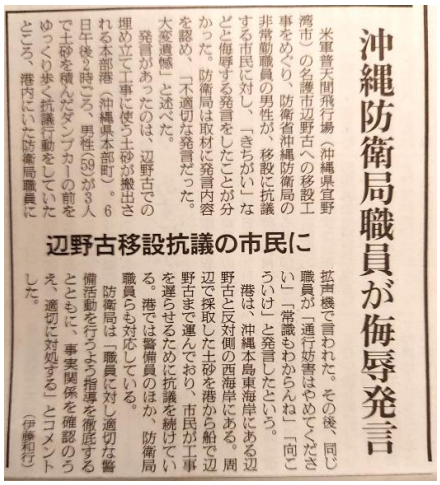
辺野古土砂ストップ北九州・世話人　宗吉　信

６月５～８日に名護市安和桟橋・本部町塩川港での辺野古埋め立て土砂搬出を遅らせる行動に参加した。現地のことは、これまで２度報告させていただいているが、今回は違った視点の報告をしたいので、懲りずに読んでいただければと思う。

■防衛局職員の差別発言

内地でも一部の新聞で報道（記事参照）されたのでご存じの方も多いと思うが、６日午後、塩川で防衛局職員の差別発言があった（沖縄防衛局の職員が抗議行動をしている市民にハンドマイクを通し「気違い」「気違いでしょ」と発言）。僕はこの日午前中は塩川で行動していたが、午後は安和で行動したので、その現場にはいなかった。翌朝、宿泊先から塩川まで、名護在住の西浦さんに車で送ってもらう途中、この事件のことを聞いた。確かに牛歩行動してダンプを遅らせようと行動している我々へ、防衛局職員がハンドマイクを手に繰り返す言葉の中には、日頃からひどいものも多い。ただ、防衛局だけでなく、警備にあたる機動隊員、警備会社職員もみな同じ対応をするのでなく、一人ひとり個性がある。「コノヤロー！」と思う相手もいれば、こんな対応されたら少しは言うこと聞いてやるかと思える相手もいる。差別発言した職員は、日頃からひどい言葉が多かったそうだ。

ただ、西浦さんの話では、現場にいる防衛局職員の多くは非常勤職員で、日給月給であり、あまり長く続かない人も多いという。どう考えてもやりがいを感じて働けるような業務ではないと思う。決して許される発言でないのは当然だが、ストレスが我々に向かいやすいのだろう。これは機動隊員、警備会社職員、ダンプの運転手も同様ではないかと思う。悪いのはこんな理不尽な工事を強行して、お金のために働かざるを得ない人たちに、過酷で非情な仕事を強制している国だ！！



沖縄防衛局職員が侮辱発言

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設工事をめぐり、防衛省沖縄防衛局の非常勤職員の男性が、移設に抗議する市民に対し、「きちがい」などと侮辱する発言をしたことが分かった。防衛局は取材に発言内容を認め、「不適切な発言だった。大変遺憾」と述べた。

発言があったのは、辺野古での埋め立て工事に使う土砂が搬出される本部港（沖縄県本部町）。6日午後2時ごろ、男性（59）が3人で土砂を積んだダンプカーの前をゆっくり歩く抗議行動をしていたところ、港内にいた防衛局職員に拡声機で言われた。その後、同じ職員が「通行妨害はやめてください」「常識もわからんね」「向こういけ」と発言したという。

港は、沖縄本島東海岸にある辺野古と反対側の西海岸にある。周辺で採取した土砂を港から船で辺野古まで運んでおり、市民が工事を遅らせるために抗議を続けている。港では警備員のほか、防衛局職員らも対応している。

防衛局は「職員に対し適切な警備活動を行うよう指導を徹底するとともに、事実関係を確認のうえ、適切に対処する」とコメントした。（伊藤和行）

辺野古移設抗議の市民に

様子を伝える朝日新聞

■「沖縄の人は疲れているのよ」

安和や塩川で中心になって行動している人たちと話すと、ほとんどが元々内地に住ん

でいた人たちだ。何で沖縄で生まれ育った人たちが少ないのだろうか？ 辺野古のゲート前に集まる人たちの中には、沖縄生まれの人たちも多いように感じるのだが…。

でも、塩川のリーダー的存在である原田さん（本部町島ぐるみ会議）が教えてくれた。「沖縄の人たちは疲れているのよ。もう 80 年近くも闘ってきたのよ。それで良くなったかというと、今はとてもひどくなっている。もう何をやっても届かないとあきらめてしまうのも仕方ないでしょ？」一方でこうも言った。「でも、80 を過ぎた方も沢山来ているわよ」

だから、今は内地の人間が頑張らないといけない時かもしれない。沖縄の人たちを疲れさせてしまうまで、僕らは放っておいてしまったのだから。三上監督のスピンオフ DVD に、宮古島や与那国島での自衛隊基地反対闘争の様子が描かれている。これを観るまで現地でこんな闘いがあっていたことさえ知らなかった。もう何年もの間、ほとんど援軍もない中で地元の人たちは闘っていたのだ。

僕らができることは少ないかもしれない。辺野古にも宮古にも与那国にも石垣にも、全部行って支援することなんてできない。でも、できることはやらないといけないと思った。健康・体力、家庭、経済、多忙さ等、いろんな事情で実際に現地に行ける人たちは多くないだろう。でも、お金だけの支援でも、知ったことを周りの人たちに知らせることでも、できる支援はいろいろあると思う。沖縄の人たちばかり、これ以上疲れさせてはいけないのではないだろうか？ ましてや真っ先に攻撃されるような危険な目にあわせていいはずはない。

■権力に立ち向かうための進化

昨年 11 月末、2 回目の行動参加の時、牛歩行動の成果が上がって港の中に閉じ込められたダンプが溢れたら、バスの中で待機していた機動隊員がたくさん出てきて、我々の行動に「規制」をかけ、港の中のダンプを一気に全部外に出してしまい、我々のそれ

朝7時に入って来るダンプに向かい、マイクで呼び掛ける地元の原田さん。7時から9時頃までの行動者は2～3人しかいません。

安和桟橋に入るダンプの、台数チェック表(記録ボード)。

までの行動が水の泡になってしまうことを経験した。それを防ぐために行動のやり方も進化していた。牛歩している時、「ダンプがたまってきたから歩くのを早めましょう」と声がかかる。ダンプが溢れて機動隊が「規制」をかけないように調整をするのだ。素手で権力に立ち向かう人たちのたくましさを感じる。

安和桟橋(琉球セメントの敷地)から出るダンプを止める行動も。こちらも、朝７時～９時、夕方３時～７時 20 分は、行動する人が少なくなります。

■運動を担う人たち

塩川２日目の時、地元の本部署の警官だけで、機動隊が出ていない時があった。常連の人に、「今日は機動隊が出ていませんが、どうしてでしょうか？」と尋ねると、「最近、埋め立てが進んで工事も余裕が出ているからか、がむしゃらに進めようとせず、ダンプも少し減らしているし、機動隊も毎日は出てこない。でも、Ｙちゃんが来ている時は機動隊も来る。」 そういえば、昨日Ｙさんは牛歩の場所から少し離れたところで機動隊員数人に取り囲まれてやりあっていた。一緒に昼食をとった時、「さっき機動隊とトラブっていたのはどうしてですか？」と不躾にも尋ねたら、「いつも強引に押す隊員がいるのよ。それで、少し離れたところに行ってやりあったの。」 と涼しげに言う。彼女も数年前に内地から移住してきた人だ。沖縄に来るまでは辺野古のことは余り知らなかったが、何と那覇の東にある与那原町から通っている。「前はもっと来ていたけど、さすがに仕事もあるから、今は週２回にしている。」そうだ。中心になって活動している人たちは、自分の生活の多くの部分を犠牲にしながらやっているのだと思う。

西浦さんは、ほぼ毎朝７時には安和に来て昼間は一旦家に帰るが、また夕方４時ごろに来て、７時 20 分にダンプの土砂搬入が終わった後、ビデオカメラや看板その他の片づけをして自分の車に積み込み、やっと家に帰れるという生活だ。朝６時半頃から来て準備をし、毎日６時間以上安和にいるＡさん、Ｈさん姉妹など、本当に大変だろう。朝夕の人が少ない時は、記録ボードを持ってダンプのチェックをしながら一人で牛歩していることもあった。夕方迎えに来るＨさんのお連れ合いは、片付けをした上、周辺の歩道の落ち葉をきれいに掃いて帰る。台風で工事が止まるとホッとするという西浦さんの言葉が実感できる。

今回も多くの人と話をさせていただいた。足掛け四日の僕の行動プランを組み立て、毎朝塩川まで送り、いろんな人と繋いでくれた西浦さん、たくさんのことを教えていただき、毎日お弁当まで作ってくれた原田さんには特に感謝!! （むねよしまこと）

浦島悦子の連続エッセイ ≪南の島から≫ №41

守りたい、それぞれの森

ヘリ基地いらない二見以北十区の会共同代表／フリーライター

先月（5 月）、宮崎県綾町を初めて訪ねた。実家（鹿児島県）の法事のため、コロナ禍以降 3 年ぶりの県外。ついでに、東京から来る息子と近場での小旅行を、と思いつき、以前から一度は見てみたいと念願していた「綾の森」を選んだ。

わが沖縄のやんばるの森は亜熱帯照葉樹林、綾は温帯性の照葉樹林だ。その違いも見たかったし、地元自治体・民間・学術機関が協働で保全に取り組んできたというところにも惹かれていた。

事前にネット検索したところ、「てるはの森の会」という NPO 法人を見つけた。綾の照葉樹林の保護と復元に向けた 100 年がかりのプロジェクトの民間部門を担い、森のガイドも行っているという。早速ガイドを申し込んだ。「但し、足が悪くてあまり歩けないので、お話を聞くだけでも」と伝言を添えて。

運転するのは 3 年ぶりという息子も私も冷や冷やしながら、宮崎市内からレンタカーで綾町へ。1 時間余で深い森の谷間の川沿いの道に出る（綾町は綾北川と綾南川という二つの川に挟まれている）。若葉が萌え、種々の花が一斉に咲くいちばん美しい時期なのだろう。森の深さに圧倒され、道端の見たことのない花々に心を奪われる。同じ照葉樹林でも植生はかなり違うことを実感した。

待ち合わせ場所に指定されたのは照葉（てるは）大吊橋入口にある「てるは森の驛」。そこに二人の女性が待っていてくれた。「てるはの森の会」事務局の S さんと、70 代のベテランガイドさんだった。大吊橋をゆっくり歩き、深い谷底を覗きながら、お二人が周りの植生や森の生き物の話をしてくれる。その後、場所を移して森の保全の歴史も聞いた。

1984 年に完成したときは世界一の長さだった（現在は 3 番目）という吊橋は、1966 年に就任し、林野庁による照葉樹林（国有林）の伐採（パルプ原木として）に反対して森を守った郷田實町長時代に造られた（現在の橋は 2 代目）という。郷田氏は吊橋を「自然林と人との架け橋」と考え、自然を守るだけでなく、照葉樹林が支えてきた伝統的な暮らしと文化を守り伝えようと、自然生態系に基づく農・漁業、工芸などの町づくりに、多くの町民や応援者とともに尽力した。

町長は代わったが、2012 年、綾はユネスコエコパークに登録された。本当に美しい森と町だが、コロナ禍で経済的打撃を受け、当然、様々な問題も抱える。綾とやんばる、それぞれの森を守りたいと改めて思った。　（うらしまえつこ）

日米安保条約連続学習会…第 4・5 回

テキスト…「日米安保体制史」(吉次公介・岩波新書)

対米姿勢、佐藤栄作から中曽根康弘まで

※学習した内容は、以下の通りです。小見出しは省略していますが、編集者の方でキーワードとなる文言・事項を太字にしています。

講師・まとめ
天久泰(当会顧問・弁護士)

前回は、米軍基地の新規接収・拡張に抵抗する反基地運動の全国的な広がり、日本への核持ち込み密約下での米原潜寄港、64 年に勃発したベトナム戦争が在沖米軍基地の位置づけに与えた影響、沖縄返還後も緊急時に沖縄へ核の再持ち込みを認める密約があったことなどについて学びました。

1.「基地公害」への批判

60 年代に入っても、ベトナム帰りの米兵による殺人などの重大犯罪のほか、米軍機による被害も重大であった。**50 年代半ばに米軍がジェット機を導入**したことにより厚木基地、横田基地では騒音被害が深刻化し、基地周辺住民による反対運動が起こり、**住民は集団移転を余儀なくされた。**

64 年 4 月には**東京都町田市への墜落事故**、同年 9 月には**神奈川県大和市に墜落する事故**が起き、死傷者が出た。68 年 8 月には板付基地がある福岡市の**九州大学にファントム偵察機が墜落、炎上**した。事故後九大学生のデモ隊と警察が衝突し、流血の事態となった。

福祉や公害問題の解決を掲げて誕生した**革新自治体の広がりは反基地運動を勢いづけた。**横浜市長がベトナムに向かう米戦車の車列を阻止し、東京都知事が横田基地内公有地の返還訴訟に踏み切るなどした。

67 年 9 月には「動く核基地」と呼ばれた原子力空母エンタープライズの佐世保寄港を日本は受け容れた。**佐藤首相はベトナム戦争を支持し、沖縄を取り戻し、国民の核アレルギーを緩和させるために受入れを決めた。**社会党、共産党、総評、全学連は寄港阻止闘争を活発に展開し、公明党も佐世保市内で集会を開き、初の院外行動に踏み切った。6 万人以上が参加した佐世保での抗議活動では、デモ隊と警察が衝突し多数の負傷者が出た。**全国 325 か所で 21 万人を動員した抗議活動が行われ**、492 名の逮捕者と 627 名の負傷者を出した。

2．進む基地の縮小

米軍基地問題で日米関係が冷却化する中、日本政府は問題を放置すれば安保体制が揺らぐとの危機感を持ち、特に都市部の米軍基地の移転を模索した結果、68 年 12 月の第 9 回日米安保協議委員会で、米側が調布飛行場、木更津飛行場、北富士演習場など約 50 基地の返還、共同使用、移転案を提示した。70 年安保が 60 年の再来とならなかった背景には、危機感を強めた日米両政府が本土における米軍基地の削減に取り組んだことがあった。

その後もニクソン・ドクトリンに沿う形で三沢のＦ4 が米国と韓国へ、横田のＦ4 が沖縄に移駐することになり、沖縄や韓国が日本本土の「危険性」低減のしわ寄せを受けることになった。

3．日中国交正常化と安保体制

1970 年代、冷戦構造は大きく変容した。中ソ対立の激化、71 年 7 月のキッシンジャー極秘訪中と 72 年 2 月のニクソン訪中による突然の米中接近、日欧の経済発展などで世界は多極化に向かったのである。

72 年に発足した田中角栄政権は、「列島改造」に着手する一方で、外交では日中国交正常化に突き進んだ。田中によれば、それは戦後処理というだけではなく、中国の脅威を低減させ、米国からの防衛力増強要求をかわし、防衛費を抑えるための「裏安保」であった。

72 年 9 月、田中は訪中した。周恩来は、「国交正常化に際しては日米安保条約にふれる必要はない。日米関係はそのまま続ければよい。」と述べ、台湾条項（「台湾の平和と安全の維持」が「日本の安全にとって極めて重要な要素」であるとの言及。）を含む 69 年の佐藤・ニクソン共同声明についても不問とした。厳しい中ソ対立を背景に、中国はソ連をけん制し、日本軍国主義復活を抑える「フタ」として安保法制を容認する方向に舵を切ったのである。

日本政府は、ニクソン訪中などによる対米不信で国民が安保体制に疑問を抱くことを恐れ、政府内では安保体制立て直しを模索する動きが出た。田中政権は、安保体制にアジアにおける国際政治の「基本的枠組み」との新たな意義を与えた。

他方で米国の力の限界を認識していたニクソン政権にとって、日本の米国離れを阻止し、負担分担を促すことは重要な課題であった。73 年 3 月の田中訪米の際、ニクソンは「太平洋のみならず世界における対等なパートナー」と日本を持ち上げ、「世界的視野に立つ日米関係」を標榜した田中も「国際社会における役割を責任を持って遂行」する姿勢を示した。

田中政権は 72 年 10 月、安保体制の堅持と米国の核抑止力への依存を前提に、「間接侵略および小規模の直接侵略に対しては我が国が独力で、それ以上の規模の武力侵略に

対しては米国の協力を得て、これを排除する」と日米の役割分担を定めた「第四次防衛力整備計画」を決定した。日米協力を重視する四次防の決定は、佐藤政権末期に中曽根康弘防衛庁長官が追求した「自主防衛論」が後退したことを意味していた。

4.「日米同盟」の端緒

田中政権の次の三木武夫政権は、74 年 12 月の所信表明演説で日米関係は「日本外交の基軸である」と述べ、76 年 11 月には、防衛費がＧＮＰの１％を超えないことをめどとするという「GNP1％枠」を閣議決定した。1％程度に抑える目的は、民生を圧迫せず、他国に脅威を与えないことにあった。

76 年 12 月に首相になった福田赳夫は自由主義諸国だけでなく、共産主義諸国との関係改善をめざす「全方位平和外交」を掲げ、78 年 8 月に日中平和友好条約を締結した。福田にとって安保条約は全方位平和外交の基礎であり、77 年 3 月の日米首脳会談では「この同盟関係は、日米の双方にとって、その基本的な利益に資する」と演説し、日本の首相が公の場で初めて「同盟」との発言を行った。

78 年 11 月、日米は「日米防衛協力のための指針」（78 ガイドライン）に合意した。日本有事の場合は、日本が「限定的かつ小規模な侵略を独力で排除」し、「独力で排除することが困難な場合には、米国の協力をまって、これを排除する」との方針が示された。また米軍は「自衛隊の能力の及ばない機能を補完するための作戦、すなわち空母や戦略爆撃機などの打撃力を用いた攻撃的な作戦を担うことになり、78 ガイドラインにより日米防衛協力が本格化した。

社会党は 78 ガイドラインでアジアの軍事的緊張が一層激化すると論じ、共産党は「日米軍事同盟の本格的発動」や米国の戦争への自衛隊の「自動参戦」につながると反発した。また、「読売新聞」は「米戦略の一環に組み込まれる」ことへの懸念を示し、「朝日新聞」も「日本やアジアの平和に役立つのだろうか」との懸念を表明した。

5. 思いやり予算の始まり

78 年 6 月の参議院内閣委員会で、金丸信防衛庁長官は円高ドル安で高騰する米軍駐留経費について、「思いやりの立場」で「できる限りの努力を払いたい」と表明し、日本人基地従業員の給与の一部を肩代わりすることを決めた。かくして、地位協定の規定を超えて「思いやり予算」が始まった。これは在沖米軍削減の芽を摘んだ。米国は思いやり予算を受けて在沖米軍削減を見送ったのである。

当初、政府は思いやり予算は一時的なものだと説明し、額も約 62 億円にとどまっていたが、その後恒久化し、増額の一途を辿り、79 年からは施設整備費も日本が負担するようになった。87 年からは地位協定（第 24 条）の拡大解釈でも正当化し得ないため，「特別協定」を結び、扶養手当や通勤手当、夏期・年末・年度末手当、退職手当などを、91

年からは光熱費を肩代わりしている。

近年思いやり予算を含めて、日本は毎年 5000 億円を超える米軍駐留経費を拠出しているが、これは米国の同盟国の中で突出しており、在日米軍基地が削減されない一因とされる。

6.「同盟」をめぐる迷走

80 年に発足した鈴木善幸政権は、平和憲法、専守防衛、非核三原則などの制約要因を強調して、当時のレーガン政権からの防衛費増強の圧力をかわそうとした。81 年 5 月の首脳会談で、鈴木はレーガンに対し、国内政治的な制約やＡＳＥＡＮ諸国の対日警戒感に言及し、防衛力増強には慎重に取り組む必要があると応じた。共同声明に「同盟関係」という言葉が盛り込まれたことについても、鈴木は「同盟」は「軍事的意味合いは持っていない」と釈明した。

この後も、米国は日本へ防衛力増強を求め続けた。鈴木政権期、防衛問題をめぐる日米の軋轢が解消されることはなかった。

7.「同盟」関係の強化

82 年 11 月、中曽根康弘政権が発足した。中曽根は、かつての自主防衛論を封じ、「節度ある自衛力で自ら国を守り、日米安保条約により米国の最大限の努力を援用できる体制」をとる方針を示しつつ、「軍事大国」にならず、近隣諸国に軍事的脅威を与えないよう配慮すると述べた。

しかし、中曽根は、日米関係修復のため、82 年 12 月、防衛費の前年比 6.5%増を決定し、武器輸出に関する規制を緩和し、対米武器技術供与に踏み切った。

83 年 1 月の中曽根訪米において、日本は「不沈空母」としてソ連のバックファイアー爆撃機の侵入に対する「巨大な防壁」となるべきであり、日本の四つの海峡を完全に支配し、ソ連の潜水艦を通過させず、他の艦艇の活動を阻止すると発言したことが注目された（「不沈空母」という発言は通訳者の意訳）。

8. 沖縄の米軍基地負担増

日米は、73 年合意の「関東計画」に基づき、関東の米空軍をほぼ半減させ、横田基地に集約した。しかし、77 年 9 月には横浜に米軍偵察機が墜落し、幼児二人と母親が命を落とした。ミッドウェイの横須賀母港化により厚木基地周辺で騒音問題も深刻化した。ミッドウェイによる核持ち込み疑惑も生じ、安保改定時に事前協議の対象となる核持ち込みは、核兵器の陸揚げとすることを安保改定時に口頭合意したとの米側と、合意を否定する日本側の対立があった。安保体制の「不透明性」が是正されることはなかった。

72 年の沖縄返還後、「関東計画」で本土の米軍基地は縮小されたが、在沖米軍基地の

削減は限定的であった。復帰の日から 3 か月間で発生した米軍人による犯罪の総数は 436 件、うち殺人、強盗、放火、婦女暴行などの凶悪犯罪が 44 件にのぼった。しかし容疑者の身柄引渡しや裁判権の行使に関する沖縄側の要求は日米両政府に届かず、沖縄県民の不満は募るばかりであった。激しい反対運動の結果、嘉手納基地から撤去されたはずのＢ52 が、天候不良のための緊急避難と称して度々飛来し、米海兵隊が県道 104 号を封鎖したうえで実弾射撃訓練を行う「県道 104 号越訓練」も政治問題化した。

在沖米軍の削減が限定的だったのは、緊張緩和が進む中で日米双方が米軍のプレゼンスを「地域安定装置」と位置づけるようになったためであった。日本政府が海兵隊の維持を米側に要請したことは、沖縄の基地負担の機会を日本政府が自ら潰したことを意味していた。本土で基地が減少したこの時期は、沖縄への米軍基地集中が進み、固定化される岐路であった。　（あめくやすし）

≪辺野古土砂北九州・今後の予定≫

●6月24日(土)…≪「沖縄、再び戦場へ」スピンオフ上映会≫　13時30分～
若松生涯学習センター　視聴覚室
●6月24日(土)…≪小倉駅前街頭宣伝≫16時～
●6月28日(水)…≪世話人会≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室
●7月08日(土)…≪連続学習会・安保条約≫　10時20分～11時50分　zoom
●7月12日(水)…≪会報発送作業≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室
●7月22日(土)…≪小倉駅前街頭宣伝≫16時～
●7月26日(水)…≪世話人会≫14時～　生涯学習総合センター・情報学習室

※台風で中止になった土砂全協の第 10 回総会は、7 月 30 日(日)14 時から zoom で開催されます。
※第 9 回辺野古土砂ストップ北九州の定期総会は、8 月 26 日(土)14 時～16 時で開催する予定です。

≪辺野古土砂ストップ北九州≫

メールアドレス…hts@mtc.biglobe.ne.jp
〒800-0117　福岡県北九州市門司区大字恒見 122-3 藤堂方
藤堂 090-6299-2608・南川 090-2853-7116・八記 080-1730-8895

2023 年 6 月 21 日